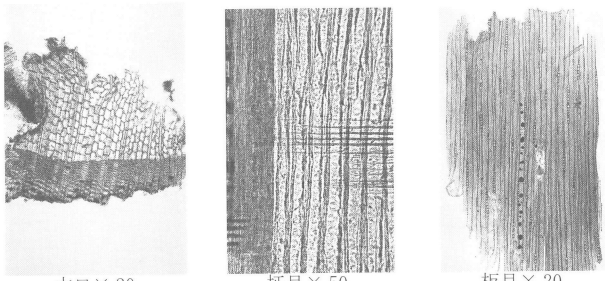
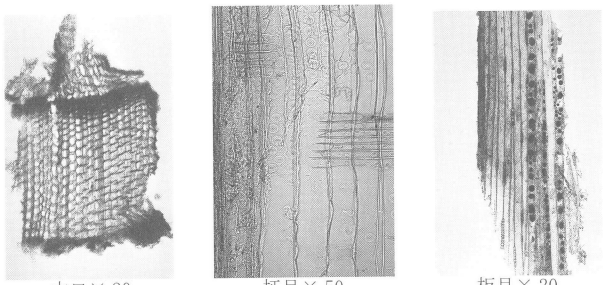


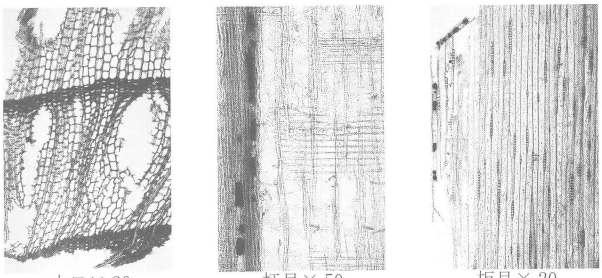
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-3　スギ科スギ属スギ



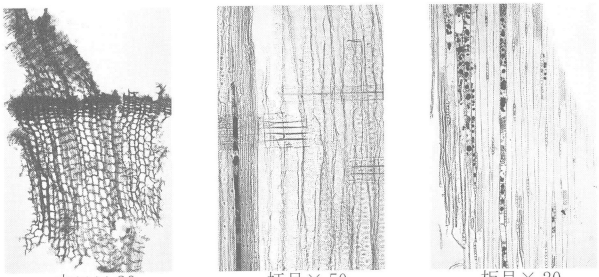
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-4　スギ科スギ属スギ



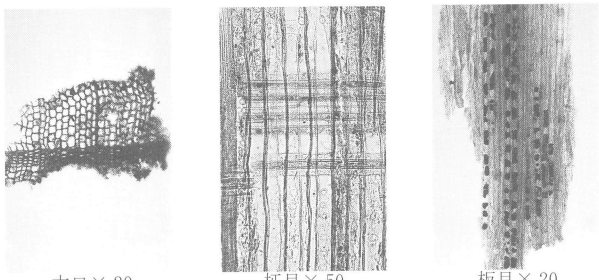
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-5　スギ科スギ属スギ



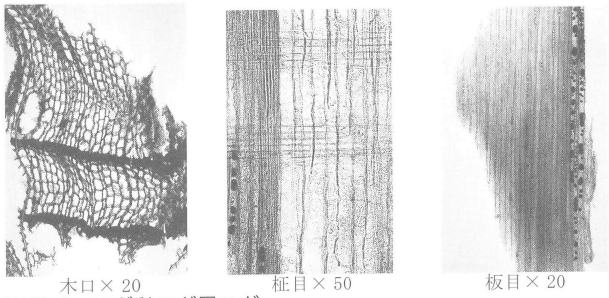
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-6　スギ科スギ属スギ



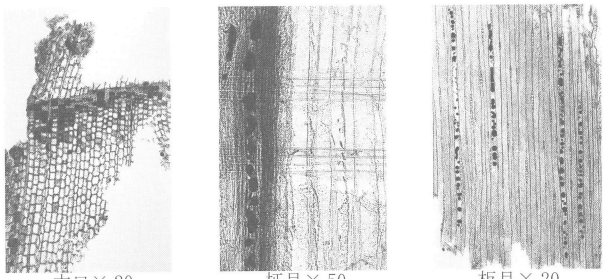
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-7　スギ科スギ属スギ



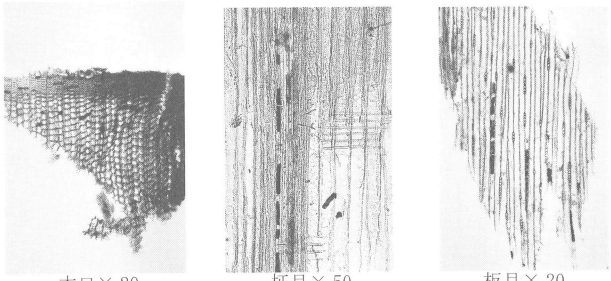
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-8　スギ科スギ属スギ



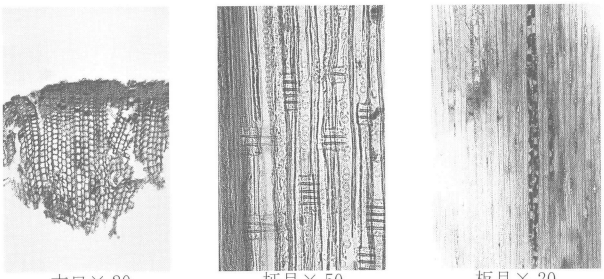
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-9　スギ科スギ属スギ



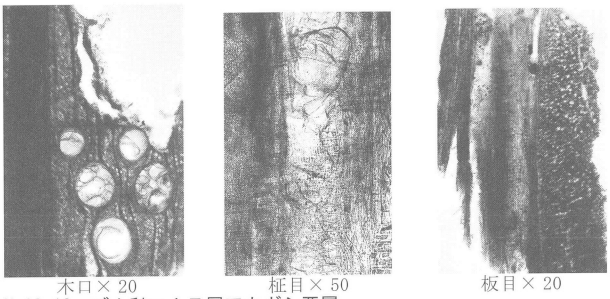
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-10　スギ科スギ属スギ



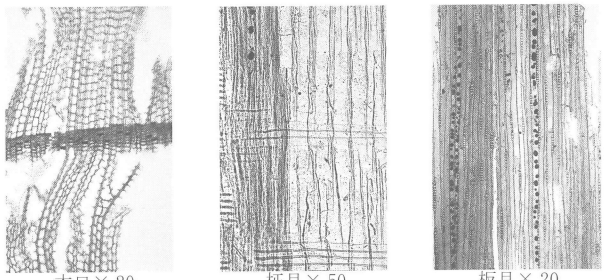
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-11　スギ科スギ属スギ



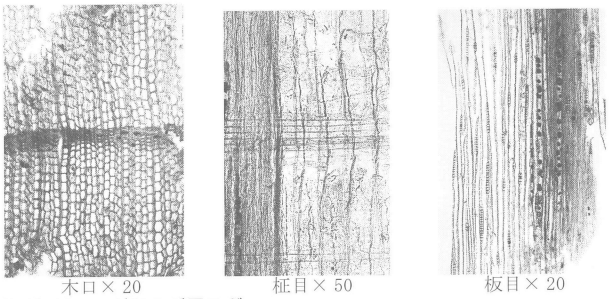
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

No18-12　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



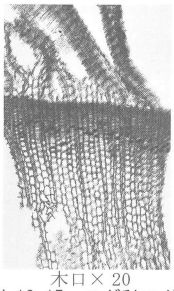
木口× 20　柾目× 50　板目× 20

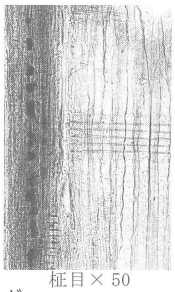
No18-13　スギ科スギ属スギ

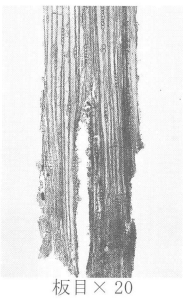


木口× 20　柾目× 50　板目× 20

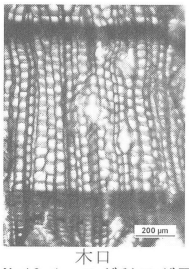
No18-14　スギ科スギ属スギ


木口×20

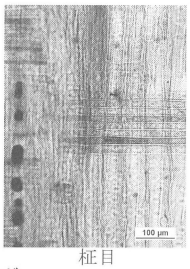

柾目×50


板目×20

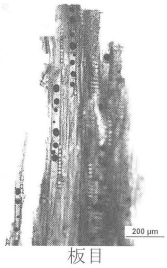
No18-15　スギ科スギ属スギ



木口

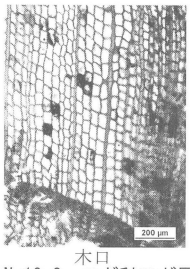


柾目

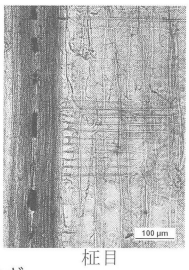


板目

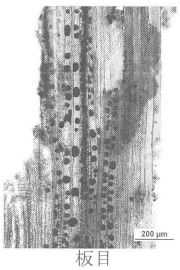
No19-1　スギ科スギ属スギ



木口

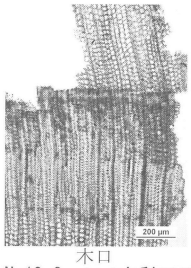


柾目

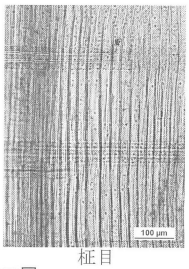


板目

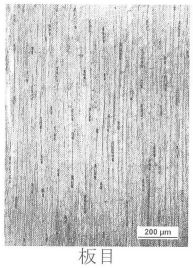
No19-2　スギ科スギ属スギ



木口

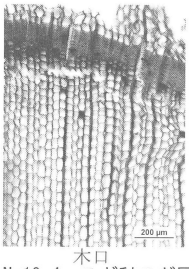


柾目

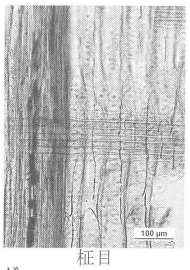


板目

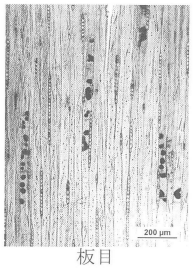
No19-3　ヒノキ科アスナロ属



木口

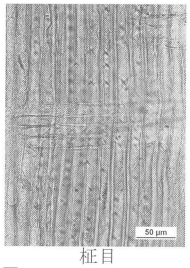


柾目

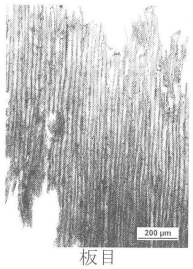


板目

No19-4　スギ科スギ属スギ



柾目



板目

No19-5　ヒノキ科ヒノキ属

第４節　津和野町木部地区出土木製品の表面観察

㈱吉田生物研究所

１．はじめに

津和野町に所在する木部地区から出土した木製品１点には、表面に何らかの塗装あるいは付着が観察された。それらについて用材や塗装構造を調査したので、以下にその結果を報告する。

２．調査資料

調査した資料は、表１に示す木製品１点である。

表１　調査資料

No.	保存処理 No.	取上 No.	品　名	樹　種	概　　要	報告書番号
1	18-10	383	曲物底板	スギ	内面のみに黒色物の付着がみられる。	(P76) 第 93 図 130

３．調査方法

表１の資料本体の内外面から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

４．断面観察結果

断面観察（写真１，２）

内面の黒色物のみられる部分から試料を採取し、その薄片プレパラートを観察した。針葉樹の木胎の上に茶色い物質が付着している様子が観察される。この茶色い物質は、漆のような塗膜は形成していない。色調や劣化の様子は、柿渋のそれに類似している。

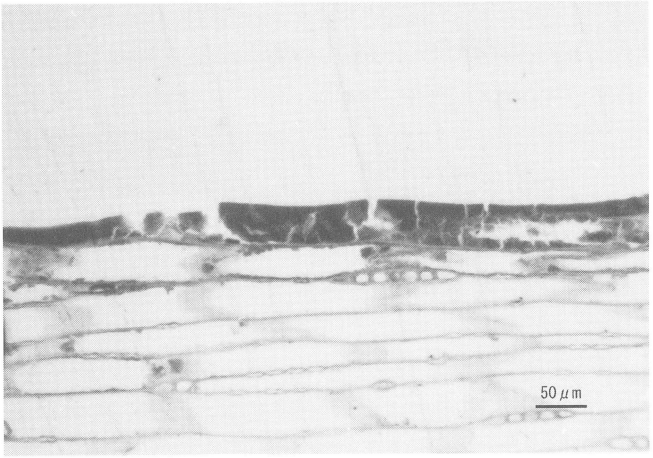


写真１　No. １表面の断面観察（× 200）

５．摘要

木部地区から出土した曲物１点の表面観察を行った。

曲物底板の内面には、黒色物が付着していたが、これは漆ではなく、柿渋に近似している。

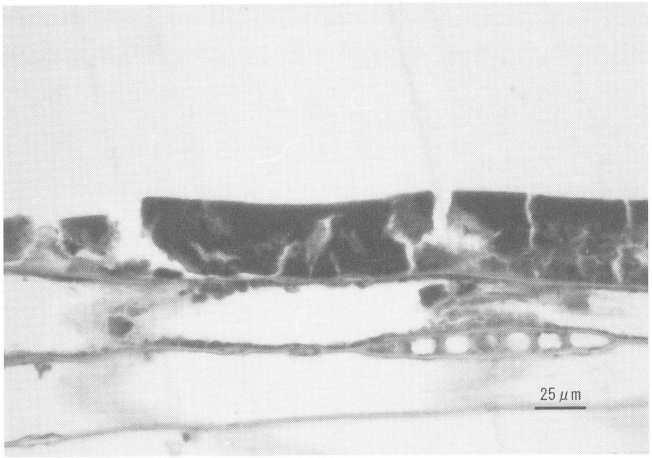


写真２　No. １表面の断面観察（× 400）

第５章　総括

調査した３遺跡では主として古代から中世までの遺跡を確認した。各遺跡の時期･性格は異なっているが、いずれの遺跡からも金属生産関連遺物が出土していることが注目される。大婦け遺跡･本郷遺跡の遺物出土状況からすると、両遺跡周辺では古代には銅精錬を含む金属生産が盛んに行なわれており、土居丸遺跡の時代である中世においても、館内の一角で鍛冶が行なわれていたことが明らかとなった。ここでは、遺跡の概要をまとめ、発掘調査の結果から派生した今後の検討課題についても若干触れたい。

土居丸館跡

調査地は、中世武士の館を示す字名「土井」等が残る場所であり、伝聞でも中世吉見氏の一族である長野氏の館跡であると伝えられていた場所に当たる。[1)] 発掘の結果、これらを裏付ける中世の遺構・遺物が検出され、中世武士の館跡の様相が明らかとなってきた。

Ａ区では、北半で中世を中心とした遺構面が４面検出された。南半は後世に遺構が削られたと考えられた。第１遺構面では基礎石列などが検出された。第２・３遺構面では溝で囲まれた掘立柱建物跡、焼土遺構などが検出された。第４遺構面では、第２・３遺構面の遺構とは主軸を異にする溝と掘立柱建物跡などが検出されている。

Ｂ区では、館の北辺を区画する可能性のある溝が検出された。溝の堆積状況からすると、15Ｃ代以降には溝の大半は埋まっていたと考えられる。

Ｃ区では、館の南端を区画する溝を検出することを目的として調査したが、後世に遺構が削られたものと考えられた。

出土遺物の中には、鉱滓・フイゴの羽口・炉壁など金属生産に関わる遺物が出土しており、その一部を分析した結果からは、鍛錬鍛冶を主とする鍛冶がおこなわれていたことが明らかとなった。このことから、主として第２・３遺構面で検出された焼土遺構の多くは鍛冶炉であったと考えられ、中世居館内の北西隅付近には鍛冶職人がいたことが推定される。

また、注目されるのは遺構の主軸の変遷と現地形の関係である。館が形成されたとみられる第４遺構面のＳＤ８は北位に大きく斜交しており、同じ地山面で検出されたＢ区のＳＤ１に交わるのではないかと推定される。これらの溝の排水方向と推定されるＢ区ＳＤ１の北東側を延長すると、ほ場整備前の水田境にほぼ近いことが分かる。その後、館の主要な時期である第２・３遺構面の遺構主軸の多くは、北位に近い向きとなっている。これらの主軸は、ほ場整備前の地形図に特徴的に示されている、いわゆる方形居館の区画に対応していると考えられる。よって、第３遺構面の形成時期に館内部で大きな改変がおこなわれ、１辺約75ｍ四方のいわゆる方形居館が成立した可能性が高いと推定される。第１遺構面の遺構も北位に近い主軸であるが、第２・３遺構面とは明らかに異なっており、新たな改変がおこなわれた可能性がある。これまで、歴史地理学の研究から地名と地割が多くの歴史を示唆することが指摘されてきているが、当遺跡において第３・４遺構面の新旧の遺構に関連しているとみられる地割が、ほ場整備前の現地形に遺されていたことが明らかとなったことは重要であると考えられる。

各遺構面の時期については、遺構面にともなう出土遺物が少なく、かつ遺構の切り合いと出土遺物の関係に矛盾が生じている場合もあるため厳密な時期比定は困難であるが、大きく捉えるとすれば第４遺構面が12Ｃ後半～14Ｃ代、第３・２遺構面が15Ｃ代～16Ｃ代、第１遺構面がSP139を根拠にすると17Ｃ代以降にかかる時期と推定される。ところで、吉見家系図上において長野氏が吉見氏の分家であるとされているのは14Ｃ後半頃のことであり、第４遺構面の時期と

推定した12Ｃ後半～14Ｃ代の大半は、系図上の長野氏以前ということになってしまう。しかし、陶磁器のみではなく土師器・瓦質土器など日常品を含めて、この時期の遺物は確実に存在しており、すべてが伝世品であったとは考えにくい。この矛盾については、現段階においては、沖本氏が考察されているように長野氏は吉見氏第４代弘信の兄弟の分割相続による庶族分家ではなく、吉見家一族の結束を図るために勢力のあるものの先祖の出自を吉見氏の惣領制に結びつけたことによる後世の系図作成という説[2)]に基づくと理解しやすいのではないかと考えられる。すなわち、土居丸館跡には12Ｃ後半以降、白磁の水注あるいは四耳壺を持ち得るような有力者である長野氏の先祖の居住があり、14Ｃ後半頃に至り吉見氏の一族に組み入れられたと考えられる。そして、館の大幅な改修がおこなれたのは吉見氏の一族とされてから後の15Ｃ代頃ではないかと現時点では考えておきたい。

なお、今回の調査では、地元で「浜の碁石」と呼ばれる玉砂利が出土している。少なくとも山間地には見かけない小型の玉石であることから、搬入された石であることは間違いなく、館内の庭園の玉砂利であった可能性も考えられる。また、元土地所有者によると、遺跡内で昭和13～15年頃にいわゆる町倒し（人力による水田区画整理）をしたということである。その際、甕に入った状態の銅銭が多数出土したが、水田盛土中に散布したということであった。現物がないため館と同時期かどうか分からないが、いつの時期かの大量備蓄銭があったと考えられる。以上、中世居館に関連する可能性のある内容を付記しておく。

採取場所	粒状滓	鍛造剥片	その他の微小遺物(g)	対象サンプル土(cc)	備考
SX 1	－	－	0.05	200	上部削平
SX 2	－	○	0.01	200	
SX 4	－	○	0.5	1,000	
SX4B	－	○	0.08	600	
SX 5	○	○	0.35	1,000	
SX 6	－	○	3.18	1,600	
SX 7	－	○	0.39	800	
SX 8	－	○	0.25	1,000	
SX 9	○	○	1.12	2,200	
SX10	－	○	0.37	800	
SX11	○	○	0.34	1,800	
SX12	－	○	0.64	1,600	
SX13	－	○	0.07	200	
SX 内計			7.35	13,000	
SK 2	－	○	0.22	1,000	
SK16	－	○	0.25	1,200	
SK 内計			0.47	2,200	
SP177	－	○	0.13	400	
SP199	－	－	0.14	300	
SP 内計			0.27	700	
遺構内計			8.09	15,900	

※未記入の遺構については水洗サンプル土なし

第１表　土居丸館跡サンプル土水洗状況一覧

左：取上点数、右：重量(g)

出土場所	鉱滓		羽口		羽口先溶解物		炉壁		粘土	
SX 4			4	452.58			4	4.35		
SX 5	1	16.6	3	58.75			4	2.81	3	251.68
SX 6	1	152.9	4	151.37	4	26.41	1	1.43	1	10.37
SX 9	1	5.79					1	0.03		
SX10							2	0.57		
SX11							1	1.59		
SX12							1	3.38		
SX13							1	0.73		
SX 内計	3	175.29	11	662.7	4	26.41	15	14.89	4	262.05
SK 2							1	2.27		
SK 4							1	1.5		
SK16							2	2.74		
SK 内計	0	0	0	0	0	0	4	6.51	0	0
SD1			1	37.87						
SD2			1	61.04						
SD 内計	0	0	2	98.91	0	0	0	0	0	0
SP 22							1	2.1		
SP118									1	43.48
SP126									1	4.84
SP588							1	2.27		
SP 内計	0	0	0	0	0	0	2	4.37	2	48.32
遺構内計	3	175.29	13	761.61	4	26.41	21	25.77	6	310.37
E6 TR-F							2	4.95		
F6 1層							2	9.03		
F6 2層					1	16.23				
F7 2層							1	2.3	1	297.28
F7 5層							1	0.66		
G6 2層							1	17.53		
F6 5層							1	0.15		
遺構外計	0	0	0	0	1	16.23	8	34.62	1	297.28
遺跡内総計	3	175.29	13	761.61	5	42.64	29	60.39	7	607.65

※未記入の遺構・包含層については該当遺物なし

第２表　土居丸館跡鍛冶関連遺物一覧

左：取上点数、右：重量(g)

出土場所	鉱滓		羽口		羽口先溶解物		炉壁		その他	
杭列周辺	1	649.91	1	12.2						
遺構内計	1	649.91	1	12.2	0	0	0	0	0	0
V19	2	76.57							1	6.19
W19	3	87.69								
X19	3	71.69	1	4.83						
表採			1	20.63						
遺構外計	8	235.95	2	25.46	0	0	0	0	1	6.19
遺跡内総計	9	885.86	3	37.66	0	0	0	0	1	6.19

※未記入の遺構・包含層については該当遺物なし

第３表　本郷遺跡鍛冶関連遺物一覧

本郷遺跡

調査区の南半を中心に遺構・遺物包含層が存在しており、北半は、後世に遺構が削られたと考えられた。調査区の南端には調査区に斜交する杭列が検出されている。この杭列付近からは粘性の強い土となるため、遺構の存在する集落域と水田等の湿地域を区画するような性格の杭列ではないかと推定される。出土遺物には須恵器・土師器のほかに平安時代後半の白磁が出土している。また、鉱滓も出土しており、古代の金属生産関連遺構が周辺に存在しているものとして注目される。

大婦け遺跡

この遺跡は、主に水田遺構とその水田を覆う遺物包含層で構成されている。水田遺構としては溝・畦畔・杭列等が検出された。畦畔は、板材と自然木を並べて杭で固定しており、この上を土で覆っていたと推定される。各遺構からは、ＳＤ６が８Ｃ前半頃、他の溝が８Ｃ後半～９Ｃ前半頃、畦畔が10Ｃ初頭頃を最新とする遺物が出土した。ＳＤ６は他の溝と離れていることを考慮する必要があるが、下層木製品の下から検出されており、主軸が上層木製品や他の遺構と異なっ

左：取上点数、右：重量(g)

出土場所		鉱滓		羽口		羽口先溶解物		炉壁	
SX 1		2	723.90	0	0	0	0	0	0
SX 2		4	2863.98	0	0	0	0	0	0
SX 3		3	583.01	0	0	0	0	0	0
SX 4		0	0	0	0	0	0	0	0
SX（計）		9	4170.89	0	0	0	0	0	0
焼土遺構		0	0	0	0	0	0	0	0
焼土遺構（計）		0	0	0	0	0	0	0	0
畦畔		1	76.17	1	17.00	2	103.25	1	1.42
畦畔（計）		1	76.17	1	17.00	2	103.25	1	1.42
SD1		0	0	0	0	0	0	0	0
SD2		0	0	0	0	1	20.64	1	32.70
SD3		0	0	0	0	0	0	0	0
SD4		0	0	0	0	0	0	0	0
SD5		0	0	0	0	0	0	0	0
SD6		0	0	0	0	0	0	0	0
SD（計）		0	0	0	0	1	20.64	1	32.70
遺構内（計）		10	4247.06	1	17.00	3	123.89	2	34.12
2層	－	4	939.32	0	0	1	20.33	0	0
	D4	2	1732.78	0	0	0	0	0	0
	D5	5	953.18	1	25.93	1	12.13	0	0
	D6	2	517.13	0	0	0	0	0	0
	E5	2	531.28	0	0	0	0	0	0
	E6	6	417.59	0	0	0	0	0	0
	E7	4	6577.80	0	0	0	0	0	0
2上層	E7	1	48.81	0	0	0	0	0	0
2下層	E7	10	11799.86	0	0	1	13.16	2	31.13
2a層	－	3	402.53	0	0	0	0	0	0
2b層	－	1	999.61	0	0	0	0	0	0
2層（計）		40	24919.89	1	25.93	3	45.62	2	31.13
3層	D4	3	577.14	1	44.01	0	0	0	0
	D4・E4	2	95.47	0	0	0	0	0	0
	E5	10	3825.44	0	0	0	0	0	0
	E6	13	2408.17	0	0	1	10.03	0	0
3上層	E5	1	844.98	0	0	0	0	0	0
3a層	－	4	1091.04	0	0	0	0	0	0
	D5	3	768.52	0	0	0	0	0	0
	D6	1	31.99	0	0	0	0	0	0
	E5	2	550.16	1	13.35	1	24.47	0	0
	E6	9	893.07	4	110.67	6	103.32	3	54.71
	E7	7	2167.76	2	80.66	0	0	1	12.01
3b層	－	0	0	0	0	1	7.83	0	0
	D5	1	329.06	0	0	0	0	0	0
	E5	1	205.62	0	0	0	0	0	0
	E6	4	160.52	0	0	0	0	0	0
	E7	1	307.82	0	0	0	0	0	0
3層（計）		62	14256.76	8	248.69	9	145.65	4	66.72
4層	E6	2	75.87	6	111.99	0	0	0	0
4上層	E5	3	243.30	2	104.55	0	0	0	0
4下層	E5	1	135.97	0	0	0	0	0	0
4a層	－	15	1536.01	11	312.83	6	80.12	1	23.97
	D5	6	269.41	2	39.83	4	41.30	5	80.38
	D6	7	271.26	7	190.42	3	98.49	0	0
	E5	7	1687.33	4	457.93	4	136.95	0	0
	E6	17	1024.86	11	480.58	10	284.52	2	65.65
	E7	5	828.88	4	57.44	2	28.14	0	0
4b層	E7	2	732.53	0	0	0	0	0	0
4c層	E6	1	543.75	0	0	0	0	0	0
	E7	4	836.24	5	135.34	4	38.10	1	22.59
4d層	－	1	5.25	1	6.86	0	0	0	0
	D4	1	90.57	0	0	0	0	0	0
	E7	0	0	1	17.27	0	0	0	0
4層（計）		72	8281.23	54	1915.04	33	707.62	9	192.59
5層直上	－	1	98.89	0	0	0	0	0	0
	E6	2	101.81	1	24.57	0	0	0	0
5層直上（計）		3	200.70	1	24.57	0	0	0	0
－	D5	1	23.09	0	0	0	0	0	0
－	D6	2	15.97	2	33.36	1	10.29	0	0
－	E7	3	2226.98	0	0	1	21.62	0	0
－	TR6	1	93.70	0	0	0	0	0	0
－	TR7	1	1325.37	0	0	0	0	0	0
－	不明（排土中ほか）	9	4759.98	4	370.28	1	8.65	1	45.44
その他（計）		17	8445.09	6	403.64	3	40.56	1	45.44
遺構外（計）		194	56103.67	70	2617.87	48	939.45	16	335.88
遺跡内（計）		204	60350.73	71	2634.87	51	1063.34	18	370.00

第４表　大婦け遺跡鍛冶関連遺物一覧

ていることから、古い時期の遺構の主軸を反映している可能性もあり、集石２の遺構主軸にも近い。

また、遺物包含層からは多量の木製品が出土しているが、その中に下駄がある。古代の下駄の出土は珍しく、未製品と考えられるものが含まれていることも注目される。なお、図・写真は掲載していないが、遺物包含層からは桃と思われる種子も出土している。

木製品の他には鉱滓も大量に出土しており、大婦け遺跡から北西側の鳶の子遺跡にかけて、金属生産に関わる工房が存在していた可能性が高い。分析の結果、鉄が主成分の鍛冶滓が多かったが、銅精錬に用いられた羽口と銅滓の存在も確認された。古代の大婦け遺跡周辺で、鉄鍛冶のみでなく銅精錬もおこなっていた事実が明らかとなったことは、極めて重要であると考えられる。

同じ遺物包含層中からは、出土事例が稀な腰帯金具の銅銙や、木簡、墨書・墨痕のある須恵器も出土していることが特記される。これらの特殊な遺物が比較的多く出土したことから、大婦け遺跡から北西側の鳶の子遺跡を構成していた集落は一般的な集落ではなく、銅を含む金属生産にかかわった特殊な集落であった可能性が高いと推定される。

なお、遺跡の存在している地山面では、地震の際に起きた地面液状化現象に伴う噴砂の痕跡が確認された。噴砂は、ピット内で確認されることが多かった。これは、ピット掘削によって土壌が弱くなったところへ噴脈が貫通した結果ではないかと推定される。また、一部の噴砂は付近のレベルが低い場所へ向かって帯状に堆積しており、ＳＤ３などの溝の上部埋土につながっていた。これらの噴砂は８Ｃ後半～９Ｃ前半頃と推定される溝の覆土となり、10Ｃ初頭頃までの遺物を含む畦畔によって切られていることから、およそ９Ｃ代に起きた地震の痕跡であると推定され、災害史の研究上も貴重な事例である。

遺跡内および周辺における金属生産について

調査した３遺跡の金属生産関連遺物の一覧表を参考までに掲載する。

金属生産関連遺物の出土量としては、大婦け遺跡が圧倒的に多く、鉱滓約 60kg、羽口約 2.6kg、羽口先溶解物約１kg、炉壁約 0.37kg を測る。調査面積の広さと低位にあるという立地条件も考慮する必要があるものの、大婦け遺跡周辺ではかなり大規模に金属生産がおこなわれていたことが推測される。本郷遺跡では調査区の一部（南東隅）の調査が主体であったこともあり、金属生産関連遺物の出土量は少なかった。土居丸館跡では焼土を伴った遺構が多く検出されたものの、それに比べると金属生産関連遺物の出土量は少ない傾向にあった。

鍛冶関連遺構が検出された土居丸館跡においては、サンプル土を採取し水洗磁着選別を試みた。しかしながら、対象が遺構内のみでサンプル土採取量が少なかったこともあり、明確な鍛冶関連遺物の検出が微量であった。そのため、粒状滓・鍛造剥片については有無を示すのみとしたが、焼土を検出した遺構の多くから鍛造剥片の検出を見たことが分かる。鍛冶滓の分析結果においても、精錬鍛冶末期ないしは鍛錬鍛冶による鉄滓であると推定され、表層の付着土砂中にも鍛造剥片が含まれていることが明らかとなっていることから、土居丸館跡で検出された焼土を伴った遺構の多くは鍛錬鍛冶を主とした鍛冶炉であったと推定される。

分析の結果からは、土居丸館跡出土の鉄滓の始発原料は砂鉄で、本郷遺跡および大婦け遺跡出土の鉄滓の始発原料は鉄鉱石の可能性が高いとされている。言い換えると、遺跡周辺では中世の鉄滓の始発原料は砂鉄で、古代の鉄滓の始発原料は鉄鉱石の可能性が高いということが分析試料の限りにおいては言える。時代によって鉄素材の始発原料が異なっていた可能性が高いという興味深い事実が明らかとなったが、各時代におけるこの地域への鉄素材の供給地はどこであったの

かという課題が生じる。

ところで、大婦け遺跡からは鉄鉱石が１点出土している。分析を実施した結果、製鉄原料の鉄鉱石であると仮定しても十分な品位であるが、分析対象とした大婦け遺跡出土鉱滓４点の成分と共通する点と共通しない点とがみられ、直接関連したものであるかは判断できないとのことであった。また、遺跡内において他の製鉄関連遺構・遺物が未確認であることからも、現時点でこの鉄鉱石が鉄生産に関わる遺物であるとの断定もできない。しかしながら、遺跡から鉄鉱石が検出された意義は大きいと思われる。仮に鉄鉱石が製鉄原料して搬入されたものであるならば、大婦け遺跡周辺に製鉄遺跡・遺構が存在するということになり、逆に製鉄原料として搬入されたものではないならば、遺跡周辺には鉄鉱石が自然石として存在しているということになり、今後の発掘調査において注意をはらう必要があると考えられる。

調査した３遺跡のある木部地区を含む周辺地域は、古生層中に火成岩が貫入してできたスカルン鉱床が多い地域であるとされる[3]。これらの鉱床を採掘したと考えられる鉱山が近世に天領となっているが、これらの鉱山は「五ヶ所銀山」と呼ばれ、戦国末期の天正期以前にすでに存在していたらしいことが最近の研究で明らかとなっている[4]。その中で、１ヶ所近世の天領にはならず廃鉱となった鉱山の記載があり、「小野の銀山今はすたる」との注記があるという。「小野」とは中世の宮座文書にもその名が現れるところの[5]、現在の津和野町中曽野小野地区のことであると推定される。時代は異なるものの、昭和16年に閉山した小野鉱山[6]があったところでもあり、小野地区に「小野の銀山」が存在していた可能性が高いと推定される。また、「五ヶ所銀山」の一つとされる「はたかさこ」については、近世に天領となり「畑ヶ迫銅山」あるいは「畑ヶ迫村古銀山」と呼ばれていたよう[7]であり、呼称から古い鉱山であったことが伺える。これらの中世以前にさかのぼる鉱山の存在と、当地における古代・中世の金属生産の原料供給の関係等については、まだ未発見の遺跡・遺物が多いと考えられるため、今後は問題意識を明確に持った調査が必要となると考えられる。

（註）

1　沖本常吉 1970「中世村落と荘園制の面影」『津和野町史』第１巻

2　沖本常吉 1970「守護領国制と吉見氏」『津和野町史』第１巻

3　下間忠夫 1970「津和野町の地質」『津和野町史』第１巻

4　川村博忠 2006「豊臣政権下毛利氏領国時代の石見国絵図－その内容と作成目的－」『歴史地理学』48-5

5　註１文献に同じ

6　木部の歴史を守る会 1993『木部誌』

7　小林准士 2005「堀氏の沿革」『旧堀氏庭園調査報告書』

図　版　1

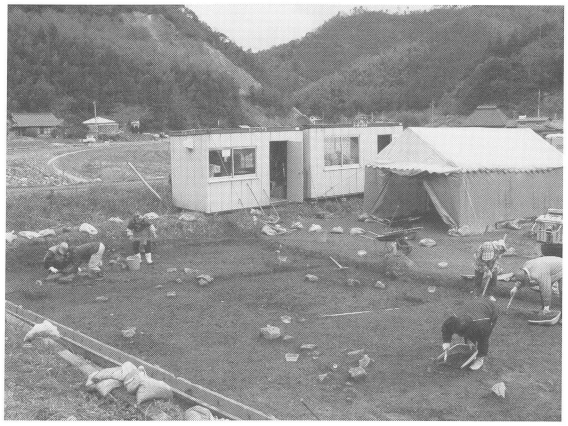
（土居丸館跡）

御嶽城跡と館跡遠景（南東より）
（左奥の山頂）

館跡と御嶽城跡（北東より）
（右奥の山頂）

館跡と猪ノ丸城跡遠景（南より）
（中央の山頂）

調査区北壁土層断面（南西より）



第１遺構面発掘作業風景（南西より）

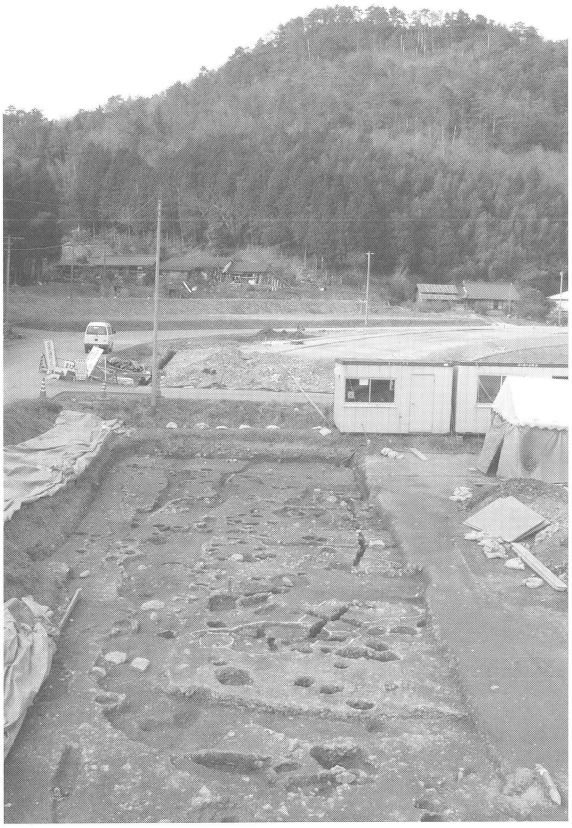
第１遺構面基礎石検出状況（南より）

第１遺構面基礎石検出状況（北より）

図　版　2

第２・３遺構面発掘後の調査区全景（北西より）

第２・３遺構面全景（北より）



第２・３遺構面全景（南より）

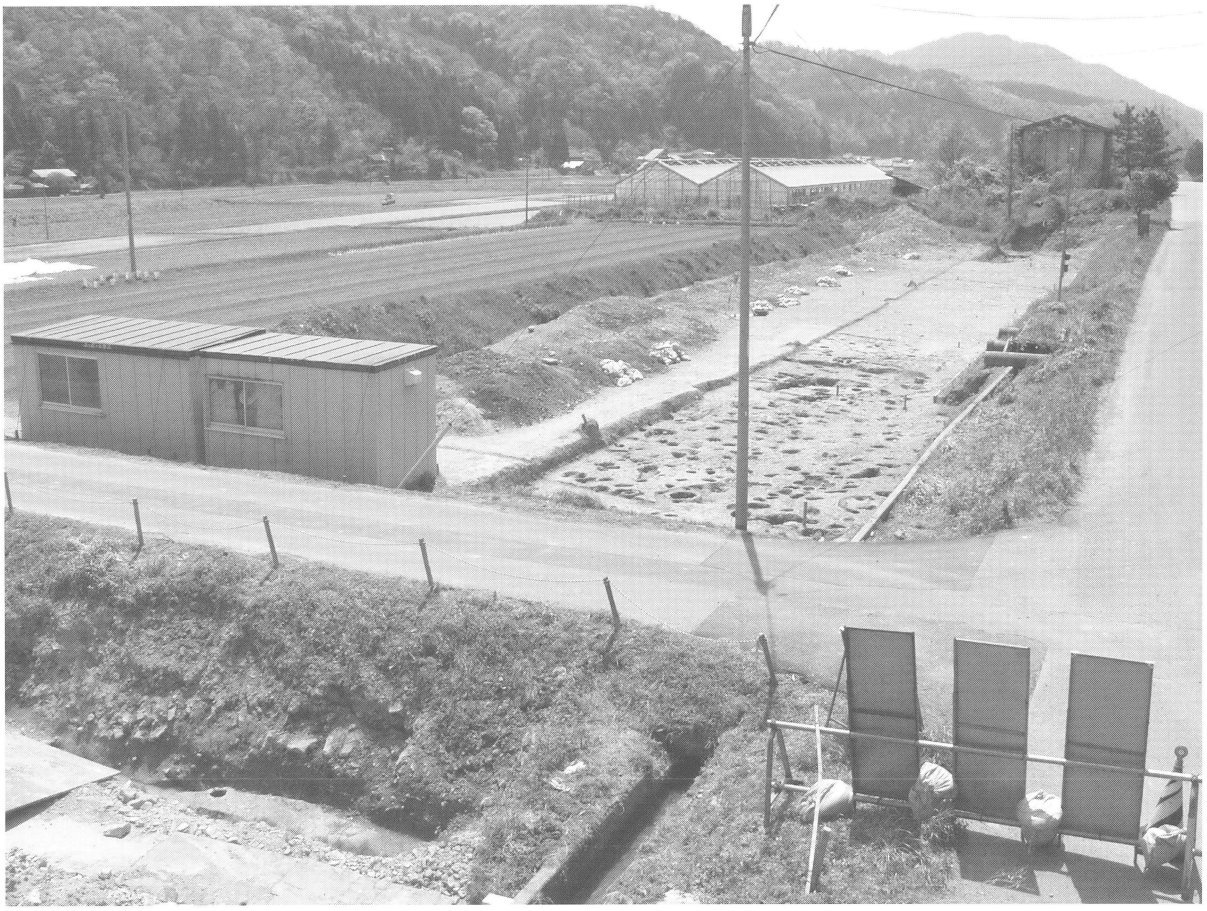
第２・３遺構面　E・Fグリッド（東より）

第２・３遺構面　Gグリッド（東より）

第２・３遺構面　Fグリッド（東より）

図　版　3

（土居丸館跡）



第４遺構面発掘後の調査区全景（北西より）

第４遺構面全景（北より）

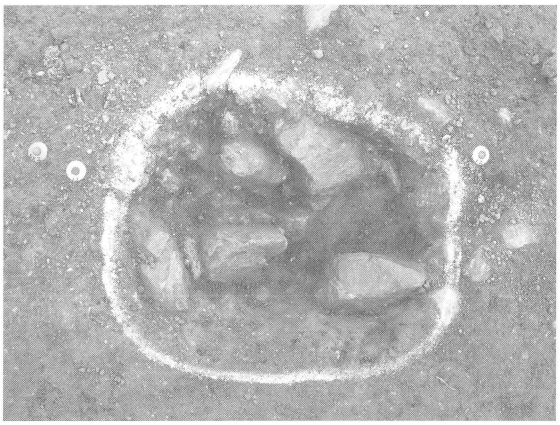
第４遺構面　Ｆグリッド（東より）

第４遺構面　Ｆ・Ｇグリッド（南東より）

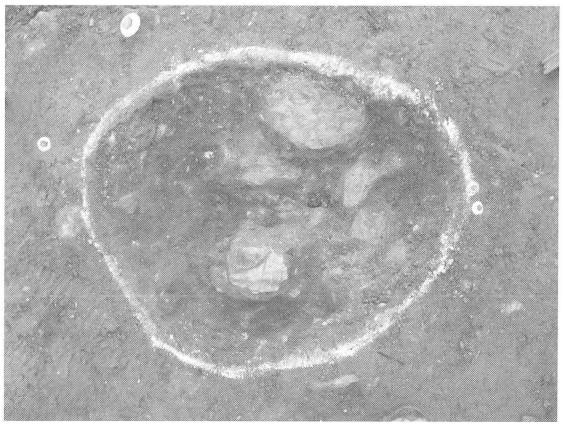
図　版　4

ＳＸ１発掘状況（南東より）

ＳＸ１土層断面（北より）



ＳＸ２発掘状況（北西より）



ＳＸ３発掘状況（北より）

ＳＸ６・５・４・12 炉跡発掘状況（西より）